

相変わらず豊かな自然と生活の印象が支配的なフィンランドであった。夏の半年間の恵まれた気候条件は植生を豊かにし、冬の厳寒は堅く締まった材木を生む。山らしい山がないから木の切り出しも容易で、それが木の文化と産業を育んだ。ただか500万の人口を支えるには、無数に点在・連続し幸をもたらす湖も含めて十分過ぎる自然に恵まれている、訪問者の目はそう映る。しかし、かつて西側の国として唯一ソ連と国境を接していた政治地理によって、小国故の悲哀を味わい続けた。ドイツ側に立った故の戦後の賠償が課せられ、完済したのは1952年のことだった。友人から聞いた子供時代の貧しい生活の様子は俄には信じがたかったことを覚えている。

私は明るく開放的な夏が好きだ。しかし、冬のない国は嫌いだ。静かな時に浸るには、身を切るような寒さと暖かさが、そして闇と明かりが必要だからだ。だから私は北欧や北海道を愛す。そんな場所で生まれた建築群を巡り歩くと、内部空間へのこだわりと、長い冬の間の心地よさを生み出す知恵を検証することができる。ヒトは身体の五感や心のイマジネー



写真49-1 テンペリアウキオ屋根

*1
Suomi:フィンランド
の本国での呼称で「湖沼」の意



写真49-2 テンペリアウキオ教会内部

ションを通して、世界を、宇宙を構想することができる。そのシェルターである住まいや建築には、生物学、生理学、心理学的な統合の成果が反映されるべきである。

ヘルシンキ都心の住宅街に半分地下に埋め込まれた、あるいは岩盤の地中深くからせり上がってきたようなこの教会テンペリアウキオ^{*2}（通称「岩の教会」:1969年竣工）はどうだ。巨大なドームによって円弧を描く大スパンの内部空間では、表面に銅をぐるぐる巻きにした円蓋の周囲から降り注ぐ昼光が、あらゆる方向に惜しみなく遊ぶ。秀逸な音響でコンサートも頻繁に開かれる。教会であることを忘れさせるような設えに時を忘れて身を委ねることができる。コンペを征しこの教会の建築家となったスオ

*2
Tempelikaution
Kirko:ルター派の教会
*3
Timo + Tuomo
Suomalainen
(1931~1988)

マライネン兄弟^{*3}の名は、アルヴァ・アアルトの影に隠れがちだが、年間50万人以上の来訪者を誇るヘルシンキの代表的な建築である。この建築がもつ時の持続性と抽象性は、荒々しい自然との接点に生み出された内部空間の心地よさに包まれながら、地球へ、宇宙へと突き抜ける。



写真49-3 天井見上げ